

絵屏風から学んだ“結”

滋賀県職員2年目地元学研修レポート

やまえこ通信



地域を知るとは 話して聞いて感じること

平成29年九月二十七日、滋賀県入庁2年目職員の、地域を知る「近江地元学研修」の受け入れを行い、山内の方々にも協力をいただきました。その成果報告が十一月二十二日に県庁で行われ、研修に訪れた8名が堂々と、成果報告してくれました。今回のやまえこ通信は、若者の気まを、地域づくり活かすために、彼らのレポート・言葉をもとに、編集しています。(文責・竜土)

山内学区は甲賀市土山町の北部から東部を占め、三重県に接する中山間地域である。人口は885人(日28年12月末時点)で、そのうち高齢者数は346人であり、人口の39パーセントを占める。学区内は黒瀬・上の平・中の組・黒川中場・川西・猪鼻・山中・笹路・山女原の9地区に分かれ、今回の近江地元学研修では笹路地区と山女原地区を訪問しました。地域には、雨乞いのための花笠踊りや箱膳、生業として稲作、炭焼きなどの文化が伝わります。地区内を東海道が通り、



笹路区・絵屏風制作の基礎となる聞き取りを円通寺をお借りしました。

近江地元学研修とは

採用2年目の滋賀県職員が、グループで県内各地を訪問し、「地元」での対話やフィールドワークを通して、地域の暮らしや歴史文化、自然、風土を体感することで、県民の思いに寄り添い、一緒に課題解決を図っていく姿勢を身に付けることを目的に、年前から実施されている全国的にも先駆的な取組です。平成二十九年度は県下

(やまえこ)が始まったことです。やまえこ活動は、地域の資源(自然・文化・人材)を掘り起こして活用し、すべての生き物が社会の構成員として共生し、生き生きと自分のしたいことができる地域づくりの手にてい目標としています。

やまえこの取組みあらし

やまえこ活動は山内小学校を中心とした子どもと保護者の活動から始まりましたが、子どもたちも減少した今では、高齢者を主役とした活動支援へと変遷しています。高齢者への聞き取りから、エゴでものを大切にすることを暮らしが明らかとなり、先人の知恵を後世に伝えていくため、最近では上田洋平氏が提唱する「ふるさと絵屏風」の作成に取り組んでおられます。山内学区のうち猪鼻・黒川・山中の3地区では既にふるさと絵屏風が完成しており、土

山町歴史民俗資料館での展示会も開催されています。研修では、まず、猪鼻地区、山中地区での「ふるさと絵屏風」作成に携わった3名の方から制作にあたってのお話や当時の思い出などを話していただきました。その後、現在「ふるさと絵屏風」の制作を行っている笹路地区と山女原地区において、聞き取りを行い里山文化について学ばせていただくとともに、「ふるさと絵屏風」作成のお手伝いを行いました。

自然の魅力

聞き取りの前に笹路・山女原地区を歩きました。が、なんととっても田園風景が印象的でした。絵屏風の作成過程で地元の方々の話を伺うと、昔からの自然に囲まれた暮らしが明らかとなりました。以下はその一部です。

文化の魅力

山内学区には、遙か昔からの豊かな文化・風習が残っています。地元の方々からは、以下のような話を教えていただきました。

花笠踊り

起源は室町時代末期にまで遡り、現在は滋賀県選択無形民俗文化財に登録されている。もともとは雨乞いのための祭りであり、列を組む集落の中心を神社へ向かって歩いたという。山女原では6年前まで行われていたが、少子化で踊り手がいなくなり、近年は行われていない。

地域・家に伝わる遺物

山女原では貝の化石が出土する。民家から弓や刀などの武器類が見つかるなど、歴史ある品物が発見されている。

惟喬親王の伝承に関する風習

惟喬親王が正月に宿を借りたという伝承が残っている。宿を貸した簡井家では、急な訪問に何も準備ができなかったが、親王はそれでも構わなかったという。当時の風習を受け継ぎ、区内の簡井姓の家では現在内門松など正月飾りの準備をしない。また、毎年4月3日には、簡井姓の家だけで惟喬親王に関する祭事が行われています。その他、現在では行っていないものも含め、冠婚葬祭など地域の昔の風習を伺いました。

多くの話を伺う中で、山内学区の魅力が数多く発見することができました。ここではその一端を自然・文化・人の三つの観点に分けて紹介します。

「川」にはウナギなどの魚がおり、よく捕まえた。をつくりだそうとする質問。『このような研修の受け入れとして協力できたことは山内にとって嬉しいことでした。多くのことを学んでくれました。これからの県行政に期待したいですね。』

さつた方の中には九十代に達する方もおられました。が、皆元気な方ばかりで、笑顔で快く話してくださり、人の温かさを感じることができました。集落の探索中も、余所者である私たちに気さくに話しかけ、地域に迎え入れてくださいました。また、地元の方同士も仲が良く、集まった場では次々と話に花が咲いていました。そういった、地域の方々の人柄や結びつきこそが現在に至るまで豊かな魅力を生み出してきた所以なのかもしれないと感じました。

心に残ることは

地域の古老の方々の話には、現代に生きる私たちの心に刺さる印象的な言葉がありました。大きく自然環境と生活環境の二つに分けて紹介します。

自然環境に関する言葉

「昔はシカやサルが人里に出ず、人里でウナギやシジミが取れた。今は逆で、シカやサルが出るけれど、ウナギやシジミは取れなくなった。」

山内学区は里山の土地であり、現在では動物侵入防止の柵が設置されるほど獣害が多いが、70年前にはシカやサルが人里に下りてくることはなかったといわれます。昔は里山の土地が動物と人の境界として機能していたが、現在では自然破壊等によって、動物と人との共生関係が崩れつつあるのではないのでしょうか。お互いの生活を侵食し書を与えてしまわないよう、自然を守っていかねばならないと感じました。

生活環境に関する言葉

「圃場整備で生活環境が激変した。」

山内学区では昭和48年の土地改良以降、圃場の改良が進み、様相が一変している。農業機械類

が導入されたのもこの頃であり、それまでの農作業の在り方はなくなっていたとのことです。私たち行政の施策は時として、人々の暮らしを一変させるということ、またそれは、必ずしも良く働くものではないということとを忘れてはならないと学びました。

「今は便利な世の中だが、昔は昔でよかったが、辺鄙な地で辛かったが、それはそれでよかった。」

昔は物質的な豊かさはなかったものの、限られた資源のありがたみを知っており、すべてを大切に使用していたとのこと。逆に現在の生活は便利である分、ありがたみを感じる機会が少なくなってきた。限られた資源の正しい使い道を今一度考えるべきなのではないでしょうか。

また、当時は物質的な豊かさこそありませんでしたが、皆で助け合い、作り合いながら暮らされており、人と人との繋がりは今よりも豊かだったと言われました。地元の方々はこの繋がりを「結」という言葉で表現されており、私たちがグループの共通課題に対する答えを見出しました。



今回は、フィールドワークとして、笹路地区、山女原地区にお邪魔させていただき、地域の方からお話を伺いました。ご協力ありがとうございました。

課題に対するマプローチ

私たちは、グループの共通課題として「県職員として県民との良好な関係作りの方法」を掲げました。今後県政を運営していく上で、県民の理解を得て良好な関係を築いていくためには必要な事は何か、県民の信頼を得つつ組織として業務を遂行するために大切なことは何かを、地元の方々の言葉や姿勢から学ぼうという趣旨です。この課題の解決に向けたヒントが、地元の方々の会話の中で、最もグループ員に深い印象を与えたのはこの言葉でした。

「後世に残したいものがあるとすれば、それは助け合いの精神や人とのつながり、いわゆる『結』というものがあ。」

私たちはこの「結」こそが、グループ共通課題に対しての一つの答えなのではないかと感じています。県政を運営して

か否かで、県政に対する信頼の程度に差が出るのではないのでしょうか。顔見知りの同僚や上司に挨拶をするのは当然のことですが、それとまた関わりのなかった人との新たな関係を生み出すきっかけもまた、挨拶です。県民の方々と直に接する際には、挨拶に心を配ることが、「結」を築く上で、土台となるでしょう。

そして、私たち県職員が積極的に県民の方々と顔を合わせる機会を作ることが、生まれた「結」を継続させるうえで大切なことではないのでしょうか。現地へ出向き、地域の方々の生の声を聞いて現状と課題を的確に把握し、机上で頭をひねるばかりではなく、直接対面し、地域の課題を身近なものとして捉えることで、県民の方々に本当に寄り添った県政の運営ができると思います。

「結」を強固にするためのヒントと考えられる言葉も、地元の方々の言葉から聞くことができました。

「昔はよく物の貸し借りをしたが、もたらした感謝の意味を込めて少し多めに返した。」等です。忙しい中、時間を割いて私たち県職員に付き合ってくれた地域の方々に感謝の気持ちをもち、その思いをしつかりと汲み取り、求められている以上のものを県政で返せるよう努力をします。その場限りの関係性でなく、今後ますます付き合っていくのだという意識を持ち、感謝の心を忘れないことで、県民の方々の真の理解を得て業務を遂行

することができるとは、何気ない暮らしが語り部を語る言葉から、私たちが掲げた共通課題に対するヒントが、いくつも授かることができました。この研修を糧に、県職員として私たちが目指すべき姿がどのようなものなのか、今一度考え直したいと思えます。

学びを明日からの職務に活かしたいメンバー感想

今回、山内地域に研修でお邪魔し、「地域再発見」の機会となりました。嬉しうに当時のお話を聞いている皆さんの笑顔に元気を頂きました。

今回このすばらしい土地と、住民の皆さんの思いを紹介させて頂き、土山に勤務する者として嬉しうに聞かせて頂きました。是非「絵屏風」を聞いてくださった方々に、是非「絵屏風」を見て頂くのももちろん、山内地域に足を運んで頂きたいものです。

山内地域の方から様々な話を伺った中で印象的だったことが2点あります。1点目は、自分たちの地域の移り変わりをよく知っておられることです。自分たちが住んでいる地域に誇りを持っておられることがうかがわれました。2点目は、

地域・人とのつながりを大切にされていることで、困っていれば助けあう・支えあうという意識が強いことがわかりました。この点は、私にとっても今後生活することにおいても、仕事上においても必ず活かして行くと思うため、心に留めておきたいと思えます。

(坂尾・東近江農業農村振興事務所)

今回、山内学区での絵屏風作成に携わらせていただく中で、地域の皆さんの地元にかける思いや共同体としての結びつきの強さを感じることができました。私自身も同じ土山町出身ですが、お聞きした話には知らないことばかりで、改めて地元について学ぶ機会を持ったことに感謝します。また、今回の研修で地域の皆さんから授かった知識は確かな財産であり、私自身も記憶し伝えていかなければならないものだと強く感じました。今後仕事をしていく中でも、そういった地域の魅力を見出し、多くの方に伝えていければと思います。(島田・甲賀農業農村振興事務所)

事前に「絵屏風」見学した際、規模の大きさと手作りの温かさを感じ、地域の文化を残すことの良さを実感しました。研修当日、制作に携わった方々のお話を聞き、その活き活きと語る様子から、とても大きな達成感を得られる取組であるということが伝わりました。地域の方々から実際に昔の生活の話聞くことは、新たな発見が多く、とても有意義な時間でした。

この経験は自分自身にとって役に立つ経験であるというのを確信しています。(重井・流域政策局)

「今の時代はもう1つないない。入庁から1年半、日々の仕事をこなし、似たような毎日を通す私に、よく耳にするこの言葉は今まで以上に重みがあるものでした。

昔は、1日を生きる為に1日かかっていた事です。それに比べ、今はボタン一つで炊事や入浴、家内でも買物物ができます。その分たくさん時間的ゆとりができました。このゆとりを無駄に過ごさず、自分の知識、経験の糧にする時間として使う事で私たちの世代の評価は違ったものになるのではないかなと思いましたが、先人達もついにゆとりをもったいない物に戻したくはないなと思えます。

(中川・湖東土木事務所)

町内を歩くときと地元の方が自然と声をかけて下さり、実際の風景や庭の痕跡等を拝見し、昔に思いを馳せることが出来ました。公民館でも多くのご高齢の方からお話を伺っており、昔を懐かしく、また大切にされているのが良く伝わりました。

人との繋がりを大切に、古き良き姿を今に伝える載せ継承すべき文化だと思えました。山内の方々の優しさ、温かさに触れた研修でした。(森・成人病センター)

昔はとにかくモノがあつたのですが、人とのつながりは豊かであつ



語り部さんたちと

たそうです。それに対して、今はその逆です。そんな現在であるから、「結(助け合い)」を伝えたいとのことでした。

訪れた地域は確かに「田舎、何も無い、不便」といった見方もあるでしょうが、現地の見学や地元の方と触れ合うことで「自然の豊かさ、人のつながりや温かさ」といった現代社会が失いつつある大切なものを感じることができました。(柳澤・工業技術総合センター)

山内地区を訪れた際、地元の方々の人とのつながりを大切にしている姿勢と、地域の様子を楽しく語ることが印象的でした。そして、後世に伝えていきたいのには助け合いや地域の人情だ、という言葉も心に残りました。物質的に豊かになると、誰かと助け合って何かをする機会がなくなり、満たされない感覚だけが積み重なっていきがちですが、そういった現在だからこそ、つながりを大切に、既にあるものに価値を見出す姿勢が大切であると、今回の研修で実感しました。この姿勢を、仕事でも自身の生活でも忘れないでいきたいです。(渡邊・観光交流局)